

日本文化の特殊性、普遍性 比較文化論の立場から

著者	別府 春海
雑誌名	日本研究・京都会議 KYOTO CONFERENCE ON JAPANESE STUDIES 1994 ?
巻	.non01-01
ページ	345-354
発行年	1996-03-25
その他のタイトル	Nihon bunka no tokushusei, fuhensei: Hikaku bunka ron no tachiba kara
URL	http://doi.org/10.15055/00003479

日本文化の特殊性、普遍性—比較文化論の立場から

別府 春海 (Stanford University)

BEFU Harumi

I. 文化人類学の立場から

日本文化の特殊性については現在までにあまたの立場から論じられてきた。殊に、日本文化論のジャンルでは幾百という書物のなかで、あらゆる角度から論じられている。これらの議論は得てして日本文化だけを微視的に分析して日本の特殊性を証明しようとしているきらいがある。また日本を他文化と比較した場合でも、その比較は方法論的にいって厳格さを欠いているものが大多数である。例えば外国で生活をした体験にもとづいて比較をした、「印象派」文化論や、世俗的通説—ステレオタイプ—をもとにした「紋切型」文化論が多い。本論では、日本文化論を文化人類学のエスニック、アイデンティティーの理論の立場からあたってみたい。

II. 「日本」とは何か

まず、日本文化は特殊である、といった場合の「日本」は何を指しているのか、ということが従来の日本文化論では、自明のこととして問題にされていない。しかし、ここで、二つの全く違った「日本」の概念が考えられる。それは「日本国家」と「日本民族」で、日本文化の特殊性、普遍性を問う場合にこの二者が混同されていることが多いようだ。

III. 「単一民族国家」の意味

日本文化の特殊性を論じるのに当って「日本は単一民族国家である」ということがよく言われる。これは日本の国家には日本（大和）民族しか在住していないことを意味している。これに对照してアメリカは多民族国家だとされる。しかし、日本はたしかに単一民族国家なのだろうか。「日本人」とは日本国家を形成する人たちだとするなら日本国家には日本民族以外の民族や人種が多く在住している。その大多数は朝鮮民族で、現在約七十万人日本国内に在住する。不法居住者も入れればその数は八十万にもなろうと言われている。そのなかには日本の国籍をもっている者もいる。北海道に在住するアイヌ人も固有の文化をもち、日本民族と同等とすることは許されない。であるなら、日本を単一民族国家とは到底いえない。

この他に、ヨーロッパ及び北アメリカからは約七万、南アメリカからも日系労働者を中心に七万、東南アジア、南アジア、近東からは不法労働者も含めれば五十万とも七十万とも言われる外国人の人口が現在日本に居住している。それなのに、「日本は単一民族国家である」といえるだろうか。このような外国人は短期滞在者で、国家を形成する人口にいれるのは間違っている、という主張がある。そこで「国家」とは何なのか、ということをかんがえてみる必要がある。

Ⅳ．「国民国家」とは何か

「国家」の概念を考えるのに当って「国民国家」という表現がよくつかわれる。これは nation-state の翻訳であるが、nation-state の概念に混同があり、その混同がそのまま日本語にもちこまれているということを論じてみたい。

そもそも nation の語源はラテン語の natio で「生まれる」ことを意味し、血を分けた、ひいては文化、言語などをもわかし合った一民族の構成する集団を指す。そのため、nation-state の概念はもともと単一民族の構成する国家として理解されてきた。イギリスやフランスやドイツが nation-state であると言うことはイギリスはイギリス民族によって構成された国家であり、フランスやドイツもそれぞれフランス民族、ドイツ民族によってつくられた国家であることを意味してきたし、また今もそのように信じられている。それになぞって日本の場合も nation-state、つまり国民国家であるとされてきた。と言うことは単一民族国家と解釈してもそれは英語の nation-state とほぼ意味は変わらないことになる。

Ⅴ．現象としての国民国家

しかし語源はどうであれ、二十世紀の末葉にあって単一の民族で100%成りたっている国家は皆無に近い。nation-state の語源の発祥地、ヨーロッパでもそのような国家は現在では存在しない。日本語で「イギリス」ないし「英国」と呼んでいる国家 (state) には“Asian”とよばれている、旧大英帝国の植民地から移住した南アジア人が多数在住している。また、同じく旧大英帝国の植民地だったアフリカ各地出身の人達も現在では第二世の世代になって定住している。現在イギリスという国家はこれらの非イギリス人の存在なしでは考えられない。

全く同様のことがフランスでもドイツでも言える。フランスにはアルジェリアをはじめ、旧フランス植民地から、非フランス民族の人たちが多く移民、定住している。これらの植民地からの移民を考慮にいれなくても、現在のフランス領土のなかだけでも、例えば、ブリタニーやコルシカなどは文化的にフランスとは一線を劃するものをもっている。と言うことはフランスは、理念としてはどうであれ、現象上は多民族国家にほかならない。

ドイツは戦後多数の外国労働者を導入し経済発展に寄与させた。その大多数はトルコ人だが、ポルトガル人、スペイン人も相当数導入した。これら外国人労働者は一定期間後は本国に帰るものと期待されていたが、その多くは本国に帰らず、今では大多数がドイツに定住の姿勢をしめし、すでに二世の世代をむかえている。ナチ政権時代に純粋民族国家 (nation state の原型!) を目指してユダヤ人、ジプシー等を虐殺したドイツは今や多民族国家になってしまった。その不純粋要素を呪い、憎むナチ後えいのスキン・ヘッドが、アリアン純粋民族の再現を夢み、トルコ人等異民族、異人種への差別、虐待行為をやめないのは、ドイツが単一民族国家であるべきだと言う nation-state の語源的理念の表出に違いない。

植民地から独立した諸国家はましてや、その通りである。インドにしろ、ナイジェリアにしろ、フィリピンにしろ、インドネシアにしろ、それぞれ多数の言語、民族が混在した国家である。これは幾多の言語、民族を無理やりにひっくるめてひとつの植民政権下に統制した領土を植民後の政権がそっくりそのまま引き継ぎ独立国家をつくったものにほかならない。

アメリカ、カナダ、オーストラリアなどの移民によって構成された国家も当然ながら多民族国家であることは承知のことである。

単一民族国家とされている韓国でさえも、いまや、何十万と言う、合法、不法の外国人労働者が単純労働階層の重要な一部を構成し、韓国経済を支えている。

このように、単一民族で成りたっている国家は現代ではどこにも見あたらないようだ。そして、国家と言うものを単位として考えた場合、その国家の現在の政治、経済、社会構成は、これら異民族の貢献があってこそなりたっているのもであって、国内に定住するこれらの異民族なしには考えられない。

日本の国家も不法労働者も含めた、幾十万の外国人が居てこそ、その経済がなりたっている事実を忘れてはならない。だからこそ、日本「国家」を云々するならば、それは到底単一民族国家であると言えるものではない。強いて日本を単一民族国家であると主張するなら、それは明治維新以前の日本のことだろう。その場合でも、北方のアイヌ、南方の琉球を日本民族、日本文化の範疇のなかににすなりといれることははばかられ、当時すでに日本は多民族国家だったとせざるを得ないのではなからうか。

この様に見てきた場合、日本は単一民族国家、アメリカは多民族国家、と言う図式は少なくとも現象のレベルでは間違っていることが明らかになる。どちらも多民族国家であり、複合社会であり、違いは程度だけである。

Ⅵ. イデオロギーとしての国民国家

では、日本は単一民族国家、アメリカは多民族国家と言う図式には全く意味がないのだろうか。日本文化論ではどうしてこの図式にこだわるのだろうか。この設問をイデオロギーの問題として考えてみればその解答はあきらかだろう。イデオロギーとは、「こうあって欲しい」と言う願望を含んだ理想像、または世界観を指している。

つまり、日本人はイデオロギーとして日本国家は単一民族国家であることを望み、その願望が事実であるかの如く信じている。そのイデオロギーが「ガイジン日本人になれない」、「ガイジンは一生ガイジン」と言う日本人論をつくりあげていることは、言うまでもない。

それに反して、アメリカの世界観は世界中からの移民によって構成された多民族国家の大前提をうちだしている。この様にしてみた場合「日本は単一民族国家、アメリカは多民族国家」、と言う図式は日本人の世界観、つまり、「日本とアメリカの違いはこうあって欲しい」と言う願望を表しているのに過ぎなく、事実関係はおおよそ無視されていることを認識する必要がある。

Ⅶ. 国家のアイデンティティーとしてのデイスクール

これまでは単一民族国家なるものが、ゆわゆる“nation-state”（「国民国家」）の歴史的意義の尾をひいて現在も存在するかの如く考えられてきていることを論じた。その結果日本は日本民族によって代表され、日本に在住する日本民族以外の民族はアイヌにしる朝鮮民族にしる、日本国家のアイデンティティーを論ずるにあつたて無視されてきた。

と言うことは、日本国家の大多数を占め、また経済的にも政治的にも日本を支配する日本民族の文化を基礎にしたデイスクールが日本国家のアイデンティティーをつくりあげていることを意

味する。そのアイデンティティーの内容を問えば、「もののあわれ」、「わび」、「さび」、「以心伝心」、「和」、「タテ社会」、「集団主義」等、数多くの日本文化論で常にあげられる、「日本独特の」、「ユニークな」、「日本にだけしかない」とされる文化的パターンが回答として跳ね返ってくる。

当然その答えには、日本国家の中に在住する少数民族は無視され、彼らの文化的パターンは全く反映されない。その結果日本国家はあたかも単一民族国家であるかのごとく誤解されることになる。

これと全く同じ現象は他の国家でもみられる。例えばイスラエル。イスラエル国家はユダヤ民族が旧パレスチナから、アラブ系であるパレスチナ人を追い出して建設された。このユダヤ民族は当然イスラエル国家の大多数を占め、またイスラエルを経済的にも政治的にも支配し、その結果イスラエル国家のアイデンティティーはユダヤ民族の文化を基礎にしたデイスクールでなりたっている。ところが、イスラエル国の中にはイスラエルの国籍をもちながら、アラブ系であり、イスラーム教を信奉する民族がイスラエル全人口の約13パーセント在住していることはあまり知られていない。そして彼らの文化はイスラエル国家のアイデンティティーのデイスクールには一切無視されている。この事実を如実にしめすのはイスラエル国家の国章である。これについてはHandelman および Shamgar-Handelman の詳しい研究報告がある¹⁾。イスラエル国章を設定するのにあたって政府は国民に案を募ったが提案された国章はどれもイスラエル国家、またユダヤ教を象徴する種々のシンボルを組み入れているが、どれ一つアラブ民族の文化を表現する要素は入っていない。だからこそ彼らの存在は外国では知られてないし、イスラエル国内では差別待遇をうけている。

これと全く同じことが日本でも言える。日本国内における朝鮮民族、その他の少数民族は日本国家＝日本民族文化の図式のもとに無視されている。日本国家のアイデンティティーのデイスクールが日本文化論になってしまい、そのため外国では日本には少数民族が全くいないかの如く思われている。国家のアイデンティティーで無視されていると言うことは、その基本的人権も無視され、差別待遇を受けることにつながっていく。イデオロギーとしての国家像からはみ出した人達はその国民として、国民と同等の待遇を受ける権利はなくなる。

多民族国家であることをうたっているアメリカもこの点では日本と同じだ、と言え以外に思うだろう。多民族国家であることがイデオロギーとして公然と認められている以上そのアイデンティティーのデイスクールにもアメリカを構成する諸民族の文化を取り入れている筈と思うのが当然である。

しかし、アメリカで多文化主義を表に打ち出したのはごく最近、過去十年くらいのことで、それでも、この考えが一般に広く浸透しているのではない。いまだに、西欧からもって来た価値観と、それを継承した、白人アメリカ人の新大陸上陸以来の歴史にアメリカを代表する世界観を求めるものが主流である。その世界観とは、例えば、

「荒くれ個人主義 (rugged individualism)」

「民衆主義 (populism)」

「民主主義 (democracy)」

「平等主義 (egalitarianism)」

「ぼろ着から富豪へ (rags to riches)」

「丸太小屋から白亜館へ (from log cabin to White House)」

「開拓精神 (frontier spirit)」

と云うような一連の価値を指す。「民主主義」や「平等主義」は当然旧世界からもってきた政治、社会理念だがアメリカ大陸で独特の発展をとげてきた。その一とつが、「荒くれ個人主義」としてフロンティアで花を咲かせ、場合によっては正義を個人の手で解決する (take the law into one's own hand) ことも辞さないのも、このアメリカ式個人主義の表れである²⁾。「ぼろ着から富豪へ」は、にわか成金を肯定する価値観であり、アメリカの物質主義を端的に表している。「ぼろ着から富豪へ」がアメリカの経済的理想なら「丸太小屋から白亜館へ」はそれににならう政治的理念で、社会の底辺にいる者でも一国の主になれる、と言う自助主義の理想をあらわしている。そのような理想は一握りの国民しか達成できないことは分かっているが、なお現在でもこの世界館はアメリカ社会の主流をなしている。

このような価値は究極は西欧文明のなかで培われ、その価値を担った白人種が新大陸を支配、開発してきた体験のなかから構築されたもので、それがアメリカという国を象徴するアイデンティティーをつくりあげている。この様な一連の価値にはメキシコ系アメリカ人や黒人のような非白人種民族の伝統的価値は見られない。そのなかで多文化主義、多民族主義は今においてさえ、ここにあげた白人の主流価値観を大前提として認めたうえでのことで、この意味では建前に過ぎないとも言える。

中国の場合もアメリカに非常に似ている。中国政府は50有数の少数民族を公けに認めている。この点では中国もアメリカも多民族国家ではあるが、一端、「中国とは何ぞや」と言う国家のアイデンティティーの問題になるとそれは儒教、漢字、墨絵、北京歌劇、など、漢民族の文化によって代表され、幾多の少数民族の文化は全く無視される。この点、世界観においては単一文化主義をとるアメリカと同じである。

この様にみえて来ると日本のみならず、ゆわゆる国民国家の多くは同様の特徴をもっている。つまり、現代の国民国家は多民族国家でありながら、同時にその国家的アイデンティティーは主流民族の文化によって象徴され、少数民族はそのアイデンティティーに代表されていない。そしてそれはその国家の少数民族に対する偏見、差別待遇をそのままあらわしている。

もう一つ、これらの諸国民国家のもつ共通点は、主流民族の文化によって代表されるアイデンティティーに対抗するアイデンティティーの貧困である。そのような、対抗アイデンティティーが皆無ではなくても、すくない、または比較的に虚弱であることが国家権力の強力を示していることにもなる。日本の場合も上述のように日本文化論に揚げられている諸題名が日本国家のアイデンティティーをあらわす唯一のデイスクールであり、これに効果的に挑戦するデイスクールはない。日本文化は「和」で表されている、と言う日本文化論の命題はすんなりとうけいれても、日本は葛藤、競合の社会である、と言うマルクス論的考えはうけいれられない。日本国家の権力が安定しているのも、こう言ったアイデンティティーの「象徴的覇権」がもたらしているとも考えられる。

こうした国家のアイデンティティーの「象徴的覇権」に成功していない国家も世界には多くある。少数民族が平和裡に又は武力に訴えて独立運動を興していることがその証しである。例えば、仏教国スリランカでは、少数民族であるヒズウ教徒のタミール族が謀反の旗をひるがえし、独立

運動を行っている。これはスリランカの、仏教を基礎としたアイデンティティーの「象徴的覇権」にタミール族が反逆、対抗していることを示している。スリランカでは多数民族であるシンハラ仏教徒はその神話にタミール族を敬虔な仏教徒を苦しめる鬼に見立て、シンハラ族との対立関係をつくり、タミール族への差別を正当化している。そのような国家像はタミール族としては到底受入れ難く、二民族間の対立、葛藤は必然のようにしておこってきたと言えよう³⁾。

世界各地で少数民族が政治的また社会的待遇改善をもとめて独立運動をしているがその根本には少数民族が文化的な意味で無視されていることをあらわしている。

Ⅶ. 「日本人」の定義

「日本人」とはなにか、「日本人」とは誰を指すか、と言うことは自明であるようでありながら実は複雑な問題である。「日本人」の定義はくだそうとすればするほど混沌としてくる。この問題をつきつめるために1987年に西宮市でアンケート調査をした。

このアンケートでは複数選択法で日本人として「絶対に必要な」条件を回答者に選ばせた。その条件と得点パーセントは次の通りである。

日本国籍をもっている	48%
日本語が話せる	37
日本人の名前を持っている	26
両親が日本人である	25
ある一定期間は日本に住む	21
父親が日本人である	20
母親が日本人である	19
物心つく時期は日本で育つ	16
日本人の顔かたちをしている	16
日本で生まれる	14

この調査で得られた結論は50%以上の票を得た条件は一つもなく、日本人の定義にはコンセンサスはないということである。上記のアンケートでコンセンサスが一番多かったのが「日本国籍」であることはいみじい。このことは、「日本人」の定義に政治的な意味合いが深くかかわっていることをしめしている。つまり日本人であることは、何にもまして日本国籍をもつことをいみしている。国籍は国家が設定する以上、日本人は、国家の一員であることが何にもまして「日本人」の定義として重要性をもっていると信じているようである。ここに日本国家のイメージと日本人像との重複をみる。

また、今回のアンケートでは直接には聞かなかったが、種々のボーダーラインのケース考えられる。その一つ一つに対して日本人はどのように反応するだろうか。例えば、海外永住の移民を日本人とみなすか。その子孫で日本語を話さない「日系外国人」を日本人とみなすか。その場合日本国籍の有無が問題になるのか。あるいは、両親が日本人の血を引いていても、「レスリー、ヤマダ」のようにカタカナで、しかも姓と名をひっくり返して書く場合はどうか。はたまた片親は日本人だが混血の「レスリー、ヤマダ」場合はどうだろう。混血でも名前が日本人の名前でない「レスリー、スミス」のような名前をなのっているものを日本人とみなすか。片親だけが日本

人の場合、父親が日本人である場合と母親が日本人である場合とでは違うだろうか。日本人の血が四分の一しかない場合、四人の祖父母のうち、誰が日本人であるかによって違って来るだろうか。上記のアンケートの結果から察して、このようなケースではコンセンサスは得られないに違いない。

また、日本に帰化した外国人は日本人とみられているだろうか。終戦以前のゆわゆる半島人は日本国民とされたが native の日本人が「半島人」を日本人とは思っていなかったし、現在でも、たとえ日本国籍をもっている、彼らを日本人と思っている者は少数だろう。外見日本人と区別のつかない、朝鮮民族においてもそうだから、ましてや白人ではまさに、その通りだろう。

日本文化の特殊性を議論場合には当然その文化を担うはずの「日本人」とは何なのか、と言う問題に当面せざるを得ない。と言うのは日本人とは誰かと言うことがわかってこそ、その日本人のもつ文化の特殊性が云々できるのであって、「日本人」の定義が下されなければ日本文化が特殊なのかどうか、という議論さえもできなくなる。

ところが、何をもって日本人たらしめるのか、と言う問いにたいして明解はない、と言うことがわかった。と言うことはつまり「日本文化」の担い手が誰であるかと言うことに対するコンセンサスが欠けていることになり、ひいては担い手のよくわからない文化の特殊性を議論する根拠もないことになる。

この様に国民の定義が不明確な事例は多分多くあるだろう。ドイツについては Diane Forsythe の報告がある。それによるとドイツ人の定義はドイツ国内に生まれ育った「純粋」のドイツ人から、ポーランドなどの隣国に在住するドイツ人、外国へ移民として出ていった、ほとんど、もうドイツ人とは云えないような場合までいろいろの段階がある、ということである⁴⁾。

IX. 帰属 (ascription) と達成 (achievement)

国籍を基礎とした国民のアイデンティティーを考がえた場合、日本とアメリカは対照的でこそあれ、類似はしていない。「日本人の場合はその国籍は基本的には生まれながらに生まれて持っているもの (ascribed status) で、帰化は可能ではあるが、これは非常にもの珍しい例外とされ事実上その数は非常に少ない。

それに反してアメリカは移民の国ともゆわれ過去には人口の過半数が移民であり、帰化することによってアメリカの国籍を得た (achieved status)。現在では過半数まではいかないが、それでも、非常に多くのアメリカ人は移民である。アメリカでは移民であり帰化人であることは全然奇異にされない。と同時に「アメリカ人」の定義として国籍のあるなしとはやかくされない。国籍があろうとなかろうと、アメリカで永く居住していれば極く常識な意味で誰でもアメリカ人である。

X. 言語

国家のアイデンティティーにおける言語の役割を考えた場合も日本とアメリカとは対照的である。日本人は日本人の identity について考えるとき言葉にこだわる。日本語を幼児期から、第一言語として話すことを日本人の条件と信じているものは国籍を必要条件とするものの次に多い。

その国の言葉を話すことをその国民であることの必要条件としているのは日本だけではない。

韓国でもドイツでもフランスでも同じ傾向がみられる。

このような国では国家、つまり主力、主流民族のアイデンティティーのデイスクールにその国の国語が大きい役割を果たしている。文化のエッセンスが文学や言語のきめ細かいニュアンスにもとめられる。国語を理解することと文化のガイストを身につけることがほとんど同一視される。

ところがイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどは各々英語を主流共通語としている。これらの国々では、英語で自己文化のガイストを表現させるわけにはいかない。と言うのは複数の国家で共有する言語で自国文化だけの固有のガイストを云々するのは当然ながら矛盾がある。勿論同じ英語でも各国間で発音や語彙、表現法に多少の違いがあり、各文化のユニークな要素を表現していることはたしかである。しかし、それはその文化の極一部しかあらわしていないのも事実である。例えばアメリカとイギリスの根本的な違いをその程度の言語現象の相違に求めるのは無理である。

XI. 外国からの影響

日本人のアイデンティティーは西欧人の日本人論に大きく影響されるが、アメリカ人のアイデンティティー論は純国産であり外国人の意見に対して全くと云っていいほど無関心である。

この対照を端的に証明するのは、外国人の著した日本人論、日本文化論のほとんどが和訳されているのに対し、英語以外で書かれたアメリカ人論、アメリカ文化論で英訳されたものはほとんど皆無に近いことにある。筑紫哲也編著『世界の日本人観』（自由国民社1989年）は外国人の書いた、日本に関する本で和訳されたものを180作紹介している。これは代表的な著作物だけを選んだものであって、決して網羅的なものではない。網羅的なリストはこの何倍にもなろう。これによって日本人はいかに外国人の日本への関心に興味をもっているかが推察される。

これに対して「翻訳アメリカ論」はどれくらいあるだろうか。百年以上も前にアメリカを訪れ、その印象を書いた、ド・トクビルの *Democracy in America* はアメリカのインテリ層によく引用されるが、それ以外の、英訳された著名なアメリカ論は皆無に等しい。

と言って英語以外の言語で書かれたアメリカ論が無いから翻訳されていない、と言うことではない。日本語で書かれたアメリカ人論、アメリカ文化論だけでも幾百とあるだろう。しかし、そのどれ一つとして英訳されていない。同様のことはドイツ語やフランス語で書かれたアメリカ論についても言える。これはアメリカ人の外国に対する態度のあらわれだろう。アメリカ人は概して未だに世界一を自負している。特に自国の事情について自分よりよく外国人が知っている、外国人から自国について学ぶべきことがある、と言う自覚が殆どと言っていい程欠如している。外国人がアメリカについて、アメリカ人以上に知っているはずがない、と言う大前提のもとにアメリカ人は思考し行動する。だからこそ外国人のアメリカ論を翻訳までして知ろうとはしない。この点日本と全く対照的だと言わざるを得ない。

XII. 「ユニークさ」の機能

ユニークでない文化は世界中どこにもない。一つ一つの文化は必然的にユニークである。しかしユニークであることを真っ向からふりかざして特殊性を論じる文化と、そうでない文化とを区

別することは出来る。日本は明かに前者に属する。

日本文化論では「日本はユニークである」とよく言われ、日本がユニークである、と言うことは日本のアイデンティティーの重要な命題の一つになっている。この重要性を踏まえて、前述の西宮アンケートでは日本文化はユニークだと思うか、どうかを聞いた。回答者の49%が日本はユニークだと答えた。

「たった49%」、と言う読者も多いだろう。日本文化論で日本のユニークさが重要命題の一つになっている以上、日本人は皆この命題を信じていると思っている人は多いだろう。その観点から見れば、49%と言う数字は確かに低い。この点についてはこの紙上では残念ながら議論を展開することはできないが、日本文化論の諸命題を信じている日本人は以外に少ないことをあらわしている。

今回のアンケートではどう言う面でユニークかはきかなかったが、おそらくユニークさについての内容は人によって異なっているだろう。だからこそ日本文化論の本が何百とある。日本文化の精神的なものを挙げる者もいるだろう。社会構造を挙げる者もあろう。だからといって日本文化がユニークであるという考えがまちがっているとは言えない。なんらかの意味で日本はユニークであると信じていることで49%の日本人が一致していることに意義がある。「ユニークさ」と云う表現にシンボリックな意味があり、「ユニークさ」という表現がシンボルとして機能している。

これと全く同じシンボリックな機能がメラネシアの国家、バヌアツ (Vanuatu) でみられる。バヌアツは植民地時代ニューヘブリデスとよばれていたが、独立後国名をバヌアツとした。バヌアツには幾多の言語、部族があり、独立国家として統一した文化をもつことは不可能にちかい。だが Vanuatu では kastom という Pigin 語の表現があり、Vanuatu 国家には kastom がある、という統一した見解をたもっている。この kastom の内容は各部族によって違うが、それはどうでもよいのである。内容がどうであれ、kastom という表現がシンボルとして国家の統合機能を果たしている。この点、日本人の言う日本文化の「ユニークさ」の概念もバヌアツの kastom の概念と全くおなじである。

XIII. 結語

日本のユニークさ云々という場合の「日本」は日本文化をさしているようでありながら、実は日本国家をさしている。まずこの認識が必要である。国家単位で比較をしていくと、日本は他の国家と類似する点が多くある。ここでいくつかの例を挙げてそれを実証した。ユニークさといわれる現象を分析することによって日本は別にユニークではない、ということをここで証明した。日本は特殊な面もあり、また他文化、他国家との共通面ももっている。

日本文化が特殊であるのは自明である。しかし全く同じ意味で世界中の文化もそれぞれ特殊である。つまり、各々の文化が特殊であるということは特殊性が普遍であると言うことでもある。しかし、日本人は日本文化の特殊性をことごとに主張するところに特殊性がある。

「文化」を論じることと「国家」を論じることとは次元を異にする。にもかかわらず、次元を統一しないで議論が延々とされている。例えば、日本 (文化) は単一民族文化だが、アメリカ (国家) は多民族国家である、と言う対照がなされる。国家は国家と比較し文化は文化と比較されなければならない。

日本国家のアイデンティティーは他国家のアイデンティティーと似たところもあれば、対照的な面もあり一概に二者が違っているとばかりはいえない。ところが、日本文化論の枠のなかでの比較は相違点にのみ重点をおき、類似点を無視してきたきらいがある。そのために日本と他文化、他国家は必要以上に違いのあるかの如くにみられてきた。今後は類似点にも焦点をおき、バランスのとれた比較研究をすべきである。

〔注釈〕

- 1) Handalman, Don and Lea Shamgar-Handelman, "Shaping time; The Choice of the national emblem." In Emiko Ohnuki-Tierney., *Culture Through Time: Anthropological Approaches*. Stanford, Stanford University Press. 1990. pp. 193-226.
- 2) アメリカでガン（銃）が行き渡っているのもこの開拓精神の名残りにほかならない。
- 3) Kapferer, Bruce. *Legend of People, Myths of State: Violence, Intolerance, and Political Culture in Sri Lanka and Australia*. Washington, D. C., Smithsonian Institution. 1988.
- 4) Forsythe, Diana. "German identity and the problem of history." in Elizabeth Tonkin, Maryon McDonald and Malcolm Chapman eds., *History and Ethnicity*. London, Routledge. 1989. pp. 137-156.